

やんばるの歴史と文化

やんばるには紀元前数世紀から人が住んでいたとみられています。14世紀までに、やんばるは沖縄の3王国の1つである北山王国の一部でした。北山王国は1416年に南の中山王国の軍隊によって陥落しました。中山王国は3王国を統合し琉球王国を設立し、1429年から続いた琉球王国は1879年に日本の明治政府によって解体され、沖縄県となりました。

自然環境と結びついた人々

やんばるの人々は歴史的に、必要不可欠な資源を森林から得てきました。琉球王国時代から、伝統的な

やんばる船を使用して、様々な必需品と引き換えに木炭、薪、竹、木材を沖縄の他の地域に輸送していました。この木材は城から船に至るまであらゆるものの建設に使用されました。この習慣は第二次世界大戦後まで続き、沖縄の復興に資材を供給しました。やんばるの森には、炭焼き窯や藍を発酵させる壺など、この産業の初期の名残が今も残っています。

琉球の信仰世界

琉球の伝統的な信仰では、海と山は一体とされていました。琉球王国の行政システムのもと、ノロと呼ばれる女性たちが各村で巫女として仕えました。ノロは、神と交信したり、人々が自然

の恵みに感謝し、悪霊を追い払うとともに、神々に豊穰と豊漁を祈る伝統的な祭りを司ったりしていました。

やんばるのコミュニティ

現在、やんばるには 10,000 人を超える人々が 3 村に分かれて住んでいます。やんばるのコミュニティの配置と環境は、天然資源の利用を促し、伝統的なライフスタイルを維持するという伝統的な琉球の習慣を反映しています。集落はもともと川の周囲に作られ、農業や炭焼きなどの活動の指定場所が設けられていたとともに、沖合のサンゴ礁からは魚介類や海藻が得られました。